

「小さな物語」

2025・5・21 重枝 一郎

高校生の中には、自分の希望進路を語ることを阻まれ、自分の生きる道がわからなくなる人がある。学校では、その生徒の「小さな物語」に耳を傾ける前に、「現在の成績」「グローバル化」「AI社会の到来」などの「大きな社会像の物語」を聞かされ、それに順応するために学ぶことを求められる。教師からは成績優秀なら難関大学をすすめられ、親からは給料が安定した仕事に就くように説得される。それでも大人は、生徒の主体性を尊重しようと「自分で決めなさい」としか言わず、どうすればよいか困る生徒が、大人の考えを忖度し、それを自分で考えたように語ることもある。また、生徒が主体的に考えた進路であっても、その進路が前例にない場合は耳を貸さないこともある。

同じようなことを【校長研修だより111「先生、僕ユーチューバーになります」】でも書いている。

私たち大人が語る「大きな物語」は、生徒が豊かに生きる道の1つに過ぎない。生徒の身体的特性や置かれた環境が異なれば、生きる道も異なる。「大きな物語」が、生徒一人一人の「小さな物語」を上書きすることはできない。

生徒にはそれぞれ「小さな物語」がある。生徒同士の「小さな物語」の響き合いがキャリア教育になる。それは人が集まる学校の存在価値をつくる。同じ学校に入った、同じクラスになった、同じ部活に入った・・・同じ選択をする生徒同士でも、選択に至るまでの人生は異なる。その生徒の過去から現在、そして未来が「小さな物語」である。

私自身、「大きな物語」への順応の空気に対して、抵抗していたのを思い出す。私は、高校に入ると一生懸命勉強するのをやめた。ある友だちを見て、「勉強ができるやつってこんなやつのことを言うんだろうな」「自分は勉強するタイプではない」と思った。でも多くの友だちが進学のために勉強していたので、何もしないのはどうかと思い、高校に入ってから私のワクワクは、「サッカーを頑張ろう」になった。それには理由があった。私の中学時代のサッカー部は学校の荒れの中心的存在の集団で、真剣にサッカーをする環境ではなかった。高校では、「真剣にサッカーをやりたい」という思いは入学前からもっていた。当然高校では、これまでの人生は異なるが、サッカー部に入部するという同じ選択をした仲間と出会う。仲間の中には、「中学の時はゴリゴリの部活だったので、のんびりやりたい」という友だちもいた。私と真逆である。ただ、私と友だちとのそれぞれの「小さな物語」の響き合いはある。私は彼の「小さな物語」を聞いて、すごく影響を受けたことを思い出す。一生懸命やるということはどういうことなんだと、なんとなく理解したのをおぼえている。大学進学でも同じような話になる。受験科目に英語がない、受験勉強をしなくても通りそうな大学を受験した私と、教員になるんだと受験した友だち。「小さな物語」は異なるが、同じ選択をしている。その後、なぜか教員になった私、結局教員にならなかった彼、次の選択はそれぞれ違ったけど、それぞれの人生は続いている。人生は続くことに意味がある。

私は、生徒一人一人の「小さな物語」に光を当てて、生徒と響き合っていくことが、進路指導の本質だと思っている。

4月の大学の礼拝で、学生に、「大きな物語」としてみんなここにいる。でも、それぞれの「小さな物語」を響き合わせながら学生生活を送ってみようという話をした。そして、一昨日の中高の礼拝でも話した。